

28. 伊達家の奉行職

問 「伊達騒動」(山田野理夫)で、奉行と家老の職名が混用されています。同一人物について、例えば茂庭定元の肩書を55ページでは江戸詰奉行、91ページでは江戸家老と書いてあります。職名としてどちらが正しいのでしょうか。

答 伊達家の職制においては、藩政執行の最高職を「奉行」と称し、「家老」という職名はありません。茂庭定元は奉行の職にあった者であります。この奉行の職名の初出は「貞山公治家記録」巻之2の天正14年〔1586〕の条で『○此年鬼庭綱元〔もにわつなもと〕ニ奉行職ヲ命セラル。三十八歳。周防良直入道左月嫡子ナリ。凡奉行職ヲ命セラル。其歲月ヲ知ラサレハ不載者多シ。』とあります。⁽³⁾この職が制度的に確立したのは、寛永13年〔1636〕政宗が歿し2代忠宗が襲封してからで、その定員を6名とし、その勤務割が、寛永13年11月20日江戸出府に先立ち、6奉行に指示した「六人の奉行衆心得可申書出」(「大日本古文書」家わけ第3、伊達家文書之3の内)の第5条に『奉行六人之内、二人者江戸供奉、残四人之内、二人者仙台、二人者在郷へ可為休息事』とあり、以後このような服務体制がとられてきました。奉行の職務権限については「司属部分録」(伊達氏史料1の27)に『御奉行ハ御上ヲ補佐シ、諸役人ヲ撰挙シ、国政大小ノ事務ヲ統へ、金穀財用ノ要ヲ裁ス』とあります。⁽⁵⁾但し、この奉行の職名は他領では理解し難い場合もあったので、対外的には便宜上、「家老」と呼び替えたこともあります。「藩臣須知」(「宮城県史」第32巻の内)にこのことを、『「他所江対シ御役人之名目申様」……一 御奉行ハ家老……』と記しています。

なお、仙台で「家老」という呼び名は、一門・一家〔いっけ〕・准一家〔じゅんいっけ〕・一族すなわち、御連枝と御歴々の家政担当の最上席の者をいったことが、法令・覚書の類に散見します。^{(6) (7)}

注(1) 通称愛蔵、後利兵衛、大隅、周防と改めた。志田郡松山で所〔町場〕拝領、知行1,125貫589文。家格は一家。父左月良元の跡を継ぎ、奉行に任ぜられた。2代忠宗の死期が迫ってもなお後継者が定まらなかった時、綱宗を家督とすべきことを切言した。奉行職を一旦退いたが、伊達兵部が後見役の時再び起用された。原田甲斐と一時同僚であったのはこの時代である。寛文6年〔1666〕1月13日江戸で歿した、46才。「仙台人名大辞書」「菊田定郷」の「茂庭定元」の項に『慶長五年仙台北城造営の時、真山式部と共に工事を奉行す』とあるのは祖父綱元(延元)の事績を誤って混入したもので、カットしなければならぬ部分である。それは、定元の生れる20年も以前のことである。茂庭の家系は、良直(周防、左月)―延元(綱元、石見)―良元(良綱、主水、周防、左月)―定元(大隅、周防)。

注(2) 伊達綱村の修史事業は、貞享3年〔1686〕田辺希文に命じて「貞山公年譜」を編纂させたことに始まり、次いで伊達氏の出自を明らかにした「伊達出自世次考」9巻、始祖朝宗から晴宗までの正統を記して「伊達正統世次考」10巻が撰述され、綱村治世の晩年、元禄15年〔1702〕に田辺希賢に命じて輝宗以降の「治家記録」の編纂が始められた。そして、元禄16年8月綱村が隠居するまでの間に、輝宗・政宗・忠宗3代の「治家記録」が撰上され、ひき続き代々の記録が編纂されて、伊達家の正史となった。仙台市博物館所蔵の原本によると、治家記録は次のような編成になっている。

四代伊達治家記録

性山公（輝宗）	}	58巻55冊	(撰了年 元禄16)
貞山公（政宗）			
義山公（忠宗）			
雄山公（綱宗）			
肯山公（綱村）治家記録		3巻3冊	
肯山公治家記録全書		38巻40冊	(享保8)
獅山公（吉村）治家記録		127巻138冊	(")
忠山公（宗村）治家記録		170巻250冊	(宝暦8)
		52巻100冊	(" 12)

六代治家記録

徹山公（重村）	}	91巻22冊	(明治7)
桂山公（齊村）			
紹山公（周宗）			
英山公（齊宗）			
正山公（齊義）			
龍山公（齊邦）		28巻10冊	(" 9)

この原本は宮城県図書館にも保存されている〔一本杉邸に伝えられていたもの、一部分欠本があり写本で補完してある〕。刊本は

1. 「伊達家治家記録 性山公・貞山公」（仙台、藩祖伊達政宗公顕彰会、昭和13年）
2. 「性山公治家記録」（「伊達史料集」上巻の内、小林清治校注、東京、人物往来社、昭和42年）
3. 「伊達治家記録」第1—33巻（平重道編、仙台宝文堂、昭和47～、第1～2巻活字・第3巻以下影印本）

注(3) 鬼庭は本姓、後に茂庭と改めたもの。綱元は初諱、延元と改めた。初め左衛門後に石見と称する。勇将左月入道良直の子。政宗の信任厚く奉行たること前後数十年、仙台開府の際も奉行在任中であつた。秀吉・家康も彼の人物・力量をよく評価していたという。寛永17年〔1640〕歿、92才。

注(4) 茂庭良直、通称周防、入道して左月斎と号した。輝宗・政宗に仕えた勇将。天正13年

〔1585〕11月17日、佐竹・芦名等の連合軍との対戦で殿軍を指揮し、10倍の敵軍を阻止したが、安達郡青田村で壮烈な戦死を遂げた。時に年72。

注(5) 伊達家の職制を成文化したもので、第4代伊達綱村時代の編集である。もと伊達家所蔵であったが、現在は仙台市博物館蔵で「伊達氏史料」1の27に収められている。「伊達氏史料」は明治40年作並清亮が編纂した自筆本46冊で、現在仙台市博物館に所蔵されている。

「司属部分録」は「仙台市史」第8巻にその全文がある。

注(6) 伊達家臣団の家格等級の最高格付けの家柄。「貞山公治家記録」巻之14、天正18年

〔1590〕8月15日の条に『当家古来一家 一族ノ列アリ、公ノ御代又一門ノ列ヲ定ラレ、一家ノ上ニ置キ玉フ、石川殿ヲ以テ其上首トセラル。』とある。政宗時代に一門に列したのは、石川昭光・伊達成実・留守政景・白石宗直・岩城政隆で、石川氏を除き伊達姓を許された。伊達成実のほかはいずれも、かつて伊達氏と対抗した大名または独立の大名の子孫で、天正末年に伊達氏に従属したもので、もとは必ずしも伊達氏との血縁関係はなかった。政宗のとき息子岩出山の宗泰が加えられ、政宗以後に岩谷堂・宮床伊達が一門に列せられ、綱村のときに、生母三沢氏の家と乳母の白河氏、弟村和〔むらより〕の子村詮に川崎2千石を与え一門に列した。よって11家となる。一門は別格で役職にはつかなかったが、「元文二年〔1737〕四月伊達吉村諸寺院会釈覚書」（「大日本古文書」家わけ第3、伊達家文書之6の内）に『……我等家ニ而ハ、一門執政ヲトリ候事無之、客人之様ニ貞山公之御代より被成かけ候……』とある。一門は、直接政治向きに参与することはなかったとはいえ、俗に「伊達家は一門強く君公弱し」といわれた通り、領内にそれぞれ小領国を形成し、強力な影響力をもっていた。「稲葉正則書状」（「大日本古文書」家わけ第3、伊達家文書之5、天和2年〔1682〕3月6日付伊達綱村宛）に『御一門方あまりにけっこうに被成来り候故、御まけ不被成候へば成不申様に成来り申候御思安〔案〕御座可有時節と存候上をかく存候故……』とあり、寛文事件の要因の一つも、このような一門の態度にあったといえる。一門席次の歌に「角〔田〕・亘理・水〔沢〕・涌〔谷〕・登米〔とよま〕・岩谷堂・宮〔床〕・岩〔出山〕・川〔崎〕に真坂・前沢」とある。

注(7) 伊達家臣団の家格の一門に次ぐ上位の等級である。一家、一族の制は伊達家には古くからあったもので、必ずしも血縁関係はなくとも、服属した有力家中を、一家一族の名を以て遇し、統制結合の強化を図ってきたのである。これに対して準一家は、一門の制とともに政宗が創始したもので、政宗の代に伊達氏に服属するに至った外様の名家に与えられた。一家・一族の制は、中世大名家一般に見られたものであったが、徳川時代に入ってからこれを持続した大名は、他になかったことからすれば、伊達家中世の伝統の強さが知られる。一家は鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亘理・梁川・片倉の17家。準一家は猪苗代・天童・松前・葦名・本

宮・高泉・葛西・上遠野〔かどの〕・保土原・福原のもと独立大名10家。一族は大立目・大町〔胆沢郡金ヶ崎〕・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島〔江刺郡上口内〕・宮内・中島〔伊具郡金山〕・茂庭・遠藤〔胆沢郡下衣川〕・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町〔宮城郡中野〕・高城・大松沢・石母田・坂の22家。このほか政宗時代の一家だった原田〔甲斐〕・砂金・大窪・志賀等の諸氏は後に断絶した。

資料 貞山公治家記録巻之2

宮城県史第2巻

29. 「伊達騒動記」(山路愛山)の出版年

問 貴館の「郷土資料目録」3によれば、山路愛山著「伊達騒動記」の出版年が明治34年となっている。私は大正3年発行のものしか見ておらず、それが初版だと思っていたが、それらの内容は同じものなのでしょうか。

答 「伊達騒動記」は、明治34年民友社から初版、〔残存少なく県内では当館のみ所蔵〕が発行されました。このことは筑摩書房発行の「明治文学全集」35及び「現代日本文学大系」6の山路愛山年譜にも記されています。大正3年発行のものは、敬文館から2冊本として出版されたもので、内容は勿論同じです。歴史家の中にさえ、明治34年初版発行の事実を知らず、「伊達騒動記」は大槻文彦の「伊達騒動実録」(明治43年発行)の焼き直しに過ぎないと、その資料価値を無視してきた向きもあったのは間違いです。「山路愛山」(松島栄一、「日本の歴史家」永原慶二・鹿野政直編著の内)にも次のように記されています。『1901年〔明治34〕には、……単行本として「読史論集」を4月に、「伊達騒動記」を7月に、それぞれ民友社から発行している。……伊達騒動記における批判的な姿勢は「伽羅千代萩」(めいぼくせんはいはぎ)的脚色を排し、さらに通俗の考えに対しても、一つの逆説的批判を提出しようとしている点でも、注目すべきであるといえる。』

注(1) 元治元年〔1864〕江戸に生まれた。本名弥吉。国民新聞などの記者として卓抜な論筆を揮い、極めて異色ある史論、文学論をあまた発表した。著「足利尊氏」「現代金権史」「伊達騒動記」ほか多数。大正6年〔1917〕歿、54才。

資料 仙台市民図書館郷土資料目録3

伊達騒動記(山路愛山)

明治文学全集35(筑摩書房)

現代日本文学大系6(筑摩書房)